幼児期における情緒形成の基礎的研究

研究協力者 竹中和子、下見千恵
(広島県立保健福祉短期大学)

主任研究者 清水凡生
(呉大学看護学部)

研究要旨 本研究の目的は、乳幼児の気質的行動特徴と保護者の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を明らかにすることである。本論文では、研究の第一段階として健康な新生児とその母親を対象に以下の調査を実施し現在も継続している。看護者による新生児行動特徴評定、授乳場面における相互作用評定と、退院前の母親に対して、出産体験に伴う感想、現在の心身の状態、対児感情や認知、そして育児意識や姿勢についての質問紙調査である。18組のケースを回収、分析した。その結果、看護者が評定した新生児の行動特徴は母親の認識と相関する項目もあり、今後ケース数を増やし因子分析等をおこなうとともに、母親の認識、1ヶ月時の乳児の行動特徴などとも関連させて分析考察していく。母親の出産体験においては、全体的には肯定的な回答傾向であった。特徴的だったのが痛みや苦痛といった否定的な内容と喜びや達成感といった肯定的な内容の両方が混在する点である。また、母親の育児意識や養育姿勢に関する記述は抽象的な内容の記述がほとんどであったことから、母親の育児意識はこれから形成していくと考えられ、諸要因については今後分析検討していく。母親の記述のなかで、個別には援助の必要が示唆される記述もみられたので、継続して関わっていく必要がある。また、今回は出産後からの調査であったが、妊娠期からの要因や分娩経過等についても関連が予測されたので、妊娠期からケースをおっていくことも検討したい。本論文では明確な示唆が提示できなかったが、今後も縦断的に調査実施し、新生児期の結果がその後の養育者の育児や子どもの行動特徴にどうつながっていくかということを明かにし、援助の指針とする予定である。

■ 問題と目的

子どもの情緒発達に生育環境が大きく影響していることはいうまでもないが、とりわけ発達初期から母親を中心とする子どもを取り巻く人的環境は、人格形成の基盤をなすもっとも重要な要因である。しかしながら、子どもの情緒発達や人格形成の過程は、多くの要因がダイナミックに影響しあっていることから、いまだ明らかになっていない点が多い。

近年、乳児は生後まもなくから有能で個性的であるということがいわれてきている。いいかえれば、乳児が単に養育者から影響を受けるだけではなく、乳児の様々な反応が養育者に影響を与えていることである（クラウスとケネル[1]，古澤[2]，古沢[3]。新生児期の行動特徴については、ブラゼルトンの新生児行動評価（NBAS）[4]があるが、評価者が限られることや簡便でないこと、また新生児期は外的環境への適応期間であるとうことで、新生児ひとりひとりの個性をとらえるということは経験的レベルに留まっている。また、陳と呉[5]は、新生児行動特徴を新生児の吸啜中断反応様式での「易刺激性」としてとらえ、1ヶ月2ヶ月3ヶ月時の行動観察により「易刺激性」に一貫性がみられたという報告もある。このように、新生児期の行動特徴とその後乳幼児期の行動特徴、気質的特徴等との関連性についての研究は、断片的な報告はあるが、系統だって縦断的分析検討している研究はほとんどみられない。

母親をはじめ養育者の育児に対する考え方や「どのような子どもに育てたいか」という養育姿勢は、養育者自身のパーソナリティや育児経験、家族関係等を基盤としているが、日々の相互作用を通して子どもの個性にも影響されて変容していくと考えられる。いいかえれば、養育者はそれぞれ育児意識や養育姿勢をもって育児に臨み、子どもの情緒発達や人格形成に大きな影響を与えているが、必ずしも養育者の思惑通りにはならず、子どもの個性に影響され変化していくと考えられる。一方では、自分の育児姿勢、育児意識を変容させず、子

どもを自分の想いどうりに育てたいとする養育者もいる。これら両者によって育てられた子どもの情緒形成過程を縦断的に研究することは、養育者の子どもへの対応と情緒形成の過程との関係を明らかにすることになる。高岸ら[6]は、年長幼児の行動上の問題や親の養育態度の問題と子どもの気質との関連性について検討した結果、幼児の"difficult child"の気質的特徴と行動上の問題、母親の不満的態度、父親の不一致的態度との間に有意な関連があったという。また、新生児期の行動特徴が看護者の肯定的あるいは否定的な認知・評価と関連があったという竹内[7]の報告にあるように、親の養育姿勢と子どもの個性や親子の関係性は、新生児期から形成されていくと考えられる。したがって新生児期から縦断的に調査し、それらの要因を検討していくことが重要で、その結果は、今日の子どもと家族を取り巻いている諸問題の解明のみならず、子どものより健全な成長発達のための育児環境の整備や家族支援のあり方についての指針としていきたい。

本研究では、乳幼児の行動特徴と保護者の心身の状態のみならず、養育姿勢や育児意識を新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を明らかにすることを目的とする。本論文では、研究の第1段階として、新生児の行動特徴と、母親の育児意識、養育姿勢、出産や赤ちゃんに対する感情や認識との関連性について行った調査内容について検討する。なお、本調査は継続中であるため、今回の報告では、主として、回答の全体的傾向や、個別のデータの分析等から今後の調査内容について方向性について述べる。

■ 用語の操作的定義

赤ちゃん：新生児、乳児に対応することばであるが、ここでは、主としてわが子としての新生児,乳児とする。

養育者：ここでは両親をさし、看護者は含めないものとする。

看護者：看護婦（士）あるいは助産婦あるいは保健婦（士）とする.

行動特徴：特に乳児および年少幼児の場合に気質や性格特性に対応するものとする。

育児意識：育児に対する考え方とする。

養育姿勢：「どんな子どもに育てたいか」という養育者の思いや態度とする。

■ 研究方法

1．被験者

出生より10日目までの健康な新生児（在胎週数37w5d～42w6d，生下時体重2，672g～3,640g，Apgar score 9点以上）とその母親（初産婦6名，経産婦12名／年齢24歳～39歳，平均年齢28.5歳，SD＝4.42）18組。

2．調査期間

1999年2月25日～1999年3月14日

3．調査場所

Y医院およびM病院産科病棟および新生児室（Y医院は母児同室制、M病院は母児別室制をとっている）。

4．質問紙

1)新生児行動特徴評定表は、ブラゼルトンの新生児行動評価（NBAS）[4]の評価内容や、庄司[2]の「新生児行動様式質問紙」の項目を参考にして作成したもので、新生児の身体生理的状態に関連した9項目と反応性や泣きなど心理的状態に関連した項目15項目の計24項目からなる。各項目は「全くあてはまらない」から「あまりあてはまらない」、「どちらと

表1．新生児行動特徴評価表項目

カテゴリー	身体生理的側面			心理社会的側面					
	栄養（摂取）	睡眠一覚醒	運動・筋緊張	外的刺激への反応性	刺激にたいする順応性	刺激に対する興奮性や泣きやすさ	泣いた状態からの鎮静のしやすさ	機嫌	泣き方
行動特徴評価項目	(1)しっかり吸啜する	(3)睡眠一覚醒のリズムは安定している	(6)手足を活発に動かす	(10)がらがらや人の声など音のするほうに顔をむける	(13)ちょっとした音にも驚く	(16)ちょっとしたことですぐに泣く	(17)泣き出してもすぐに泣きやむ	(18)表情が穏やかである	(20)あまり泣かない
	(2)母乳やミルクの飲みはよい	(4)眠っているときはぐっすり眠る	(7)四肢の動きがなめらか	(11)人の顔をじっとみつめる	(14)顔を拭くと嫌がる			(19)笑顔をよくみせる	(21)泣き声は激しい
		(5)眠っていることが多い	(8)抱っこすると落ち着く	(12)目と目がよく合う	(15)新しい刺激にすぐに慣れて落ち着く				(22)泣き声は弱弱しい
			(9)抱っこするとはじめからだを反らせる						(23)泣き声は甲高い
									(24)泣いている持続時間が長い

もいえない」、「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の5段階で評定する（表1）。

2)新生児と母親の相互作用評定表

授乳場面における新生児と母親の相互作用に関するもので、母子の協応性を問うている2項目と主として母親の赤ちゃんへの働きかけを問うている2項目、母親の疲労について問うている1項目の計5項目からなり、「新生児行動特徴評定表」と同様に、5段階尺度で評定する（表2）。

3)母親に対する出産・育児に関するアンケート

(1)出産体験後の感想、(2)赤ちゃんへの思い、(3)身体の調子、(4)母親としての実感、(5)育児について、(6)赤ちゃんの父親の反応、(7)赤ちゃんに対する認識、(8)今の気持ち、(9)赤ちゃんへの感情についての項目で、計76項目からなる。(1)は自由記述、(2)は文章完成法、(3)～(9)は5段階尺度による回答の方式をとった（後者の項目の内容は表3に示す）。また、(7)の項目は、看護者による「新生児行動特徴評定表」と一部対応した内容とし、(8)はSTAI[4]を参考にできるだけ項目数が少なくなるように配慮し、比較的答えやすいと思われる同数の肯定的項目と否定的項目を設けた。さらに、(9)の項目は、花沢[10]の「対児感情評定尺度」の項目より、回答しやすいと思われる項目を検討し、接近項目と回避項目が同数となるように抽出し、接近項目とされていた項目は、肯定的項目と、回避項目とされていた項目は否定的項目として整理した。

表2. 新生児と母親の相互作用評定表（授乳場面）

カテゴリー	協応的関わり		母親からの積極的関わり		母親の疲労感
授乳場面における相互作用評価項目	(1)母子ともにゆったりしている	(2)母子はよく見つめ合っている	(3)母親はよく語りかけている	(4)母親はよく微笑んでいる	(5)母親は疲労が感じられる

3．調査手続き

1)同一新生児について看護者1名または2名が、「新生児行動特徴評定表」にしたがって生後2日目以降にそれぞれ評定を実施した。

2)同一組みの新生児と母親について、看護者1名または2名が、それぞれ「授乳場面における母子相互作用評定表」にしたがって、生後4日目より退院までの期間実施した。

3)各施設の看護者が退院前の母親に「出産や育児に関するアンケート」を個別に配付し、退院までに回収した。

なお、ご協力頂いた施設および母親や看護者には、本研究の主旨にご賛同いただいたうえで実施した。調査時間等を配慮して、質問項目は最小限とし、また、縦断的研究であることから記名方式をとったが、個人のデータの守秘に努めた。

4．分析方法

1)5段階尺度で回答をもとめた各項目は、「非常にあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点「あまりあてはまらない」を2点「全くあてはまらない」を1点として分析した。今回は、調査実施途中の結果報告で、被験者数が少なく、主に全体の傾向や各ケースの質問項目についての検討を行った。

2)「出産・育児に関するアンケート」で、出産後の感想の自由記述や、赤ちゃんへの思いについての文章完成形式の記述は。研究協力者2名が個別にKJ法11,12,13)に基づきグルーピングした後、両者の結果を合わせて、不一致の部分は検討結果として示した。

3)その他で記述のあった自由記述部分は、特にグルーピング等はせず、そのまま,個別のケースを見ていく際に検討する資料とた。

4)母児同室制（13組）と母児別室制（5組）のケースで違いがあるかどうかについて検討した。

■ 結果と考察

1．新生児の行動特徴について

表2に示すように、行動特徴項目の評定が「どちらともいえない」をはさんで両極にまたがる、つまり、得点範囲が4点または5点から2点または1点の項目は、授乳に関する項目(1)しっかり吸啜する、(2)母乳やミルクののみはよい、睡眠－覚醒についての項目(3)睡眠－覚醒のリズムは安定している、(5)眠っていることが多い、刺激に対する順応性に関する項目(14)顔を拭くと嫌がる、鎮静性に関する項目(17)泣き出してもすぐに泣きやむ、泣きに関する項目(21)泣き声は激しい、(23)泣き声は甲高いであった。授乳に関する項目の評定は、項目(1)(2)の評定は相関（$r=.79, p<.0001$）しており、特に項目(1)(2)のいずれかの得点が2点と低かった2事例では、母親が扁平乳頭のため授乳がうまくいってい

表3. 母親に対する育児に関する質問紙項目

カテゴリー	身体の調子	母親としての実感をした時	育児について	赤ちゃんに対する父親の様子
項　目	(1)母乳はよく出る (2)よく眠れる (3)お乳が痛い (4)体がだるい (5)腰が痛い	(6)妊娠に気づいたとき (7)胎動を感じたとき (8)超音波で胎児を見たとき (9)陣痛がはじまってから (10)出産の瞬 (11)赤ちゃんと対面したとき (12)抱っこしたとき (13)授乳したとき (14)まだ実感がわかない	(15)育児は楽しみだ (16)育児は大変だ (17)仕事や家事との両立ができるかどうか心配 (18)この子とならどんな困難にも耐えられる (19)この子と一緒に成長したい (20)子どもによい環境を提供するのは親の責任だ (21)子どもは愛される存在 (22)この子は私の生きがい (23)育児や家事は夫と協力してするつもりだ (24)この子にはできる限りの愛情を注ぐ (25)できるだけ早く仕事に復帰したい (26)育児に専念したい (27)この子中心の生活になるのはしかたがない (28)この子を見ていると母親の私がいなくてはと思う (29)この子は私のことが好きである. (30)これから育児がうまくやっていけるか心配である (31)私は母親にむいている	(32)誕生を喜んでいる (33)とてもはりきっている

カテゴリー	赤ちゃんに対する認知	母親の今の心理状態	
		ポジティブ項目	ネガティブ項目
項　目	(34)母乳(ミルク)をよく飲む (35)元気がいい (36)よく笑顔をみせる (37)私のことをよくみる (38)抱っこすると安心する (39)話しかけるとじっと聞いているように感じる (40)母親だとわかっていると感じる (41)よく眠る (42)よく泣く (43)おとなしい子だ	(44)たのしい (47)満足している (48)ゆったりした気持ちである	(45)不安である (46)緊張している (49)心配である

カテゴリー	赤ちゃんを思い浮かべたときの感じ	
	ポジティブ項目	ネガティブ項目
項　目	(50)あたたかい (52)うれしい (53)いじらしい (56)ほほえましい (58)ういういしい (61)やさしい (63)うつくしい (65)すばらしい	(51)よわよわしい (54)やかましい (55)あつかましい (57)むずかしい (59)めんどくさい (60)こわい (62)うっとうしい

ないことや、分娩時間が長かったことが看護者からのコメントにあり、それらの影響も考えられる。

2．授乳場面における母子相互作用について

5項中4項目については、全事例について「非常にあてはまる」かまたは「ややあてはまる」と評定しており、肯定的な評価であった。母親の疲労についての項目では、「ややあてはまる」から「あまりあてはまらない」までの範囲で評価され、個人差がみられた。母児同室の場合は母子との相互作用は促進される一方で疲労の問題がよくいわれているが、この18ケースでは母児同室制か母児別室制

かによる違いはみられなかった。

3．出産・育児に関する母親の思いについて

1)出産後の感想

18ケース中15名の母親からの回答が得られた。記述内容の多くは、分娩に伴う痛いや苦痛や妊娠期のつらさなどの否定的な感想と、安堵感や出産に対する感動といった妊娠・分娩に対する肯定的な感想であった。興味深いことに、9ケースについては、肯定的と否定的両方の感想が並列して述べられており、母親にとって出産は、苦痛を伴うけれどもそれを乗り越えてきたことから得られる喜びや安堵感が大きいものと考えられる。その他、分娩体験にとどまらず母親としての責任や子どもへの愛着、これからの育児に対する不安や期待についての記述もあった。「母親としての責任」に思いが向いている2名母親は、生後6日目と9日目に、「育児に対する不安」を述べている3名の母親は、生後6日目（2名）と11日目にアンケートに記入しており、回答内容の差は、実施時期の影響も考えられる（記入時期は生後3日目～11日目）。しかしながら、生後9日目に記入した母親に「不安」の記述はなかったことから、今後ケースを増やして検討しする必要性がある。また、いずれにしても、15名中3名の母親が、今後の育児に対する不安を表出していることは、支援の必要性があると考える。

2)赤ちゃんへの思いについて（文章完成法形式）

①”赤ちゃんの第一声は”

全ケースから回答が得られた。11名が、泣き声そのものについて表現している。また、声の大きさをあげ、赤ちゃんが元気に生まれたという安心と誕生の感動を表現した母親もいた。多くの母親が分娩体験とあいまって赤ちゃんの泣き声そのものが印象として残っているようである。

②”私が最初に赤ちゃんを見たときの印象は”

18ケースすべての母親が回答している。赤ちゃんに対する客観的な印象の表現、無事生まれた安堵感の表出、さらに子どもへの愛着や、生命の神秘の感動、これからの育児に対する楽しみなど具体的な内容の表現もあった。「かわいい」という赤ちゃんへの愛着を感じている母親は3名で、そうち1名は初産婦であった。「客観的印象」についても、初産婦、経産婦の両者が表現している。出産経験の有無によ回答内容の違いがみられたのは、初産婦に「安堵」に関する記述がなく、「生命の神秘」に関する内容の記述が比較的みられたことである。

③”私が最初に赤ちゃんを抱いた時の印象は”

18ケースすべての回答が得られた。「かわいい」といった赤ちゃんへの愛着を表現した母親が多かった。前項の”最初に赤ちゃんを見たときの印象”では3名だったが、8名と”抱っこする”ことで赤ちゃんへの愛着表現が増加している。その他、「軽い」など感覚的印象を表現した回答があった。「軽い」と表現している母親と「重い」と表現している母親の両方がいたことは、分娩状況との関連や今後の育児への影響が予測される。

④”私は赤ちゃんが泣くと”

18ケースのうち17ケースについて回答が得られた。分析の結果、泣きに対する母親の養育行動に至る一連プロセスが得られた。赤ちゃんが泣くと母親は「不安」になるが、対処行動をとりながら、赤ちゃんの要求を考え、行動する。「不安」を表出した母親は経産婦で1名みられたが、初産婦では半数を占めていた。初産婦は「不安」を感じながらも、赤ちゃんが何を要求しているかを考えている。経産婦ではほぼ3割が「行動」についての記述があるが、初産婦ではがみられなかったことから、経産婦に比べ行動レベルへの発想が展開にくいと考えられる。

⑤”私は赤チャンが泣くときは”

18ケース中回答が得られたのは15ケースであった。多くの母親が母性的対応を表現している。それは授乳するなどの生理的欲求への関わりのみならず、抱っこしたりあやしたりといった心理的欲求への関わりについて、多くの母親が回答している。

⑥”私が声をかけると赤ちゃんは”

18ケース中17名の母親が回答したが、そのほとんどが視覚的反応で、「母親だとわかるかのよう」というような相互作用的解釈がみられる。また、回答したすべての母親が、自分の声かけに対する赤ちゃんの反応として受けとめた表現をしている。さらに、愛着として発展させた記述もみられた。

⑦”私が赤ちゃんを抱くと”

18ケース中回答が得られた15名の母親は、前項の”私は赤ちゃんが泣くときは”と同様に、母親の抱っこに対する赤ちゃんの反応としてとらえた表現をしている。しかしながら、視覚的反応をあげたものはなく、「赤ちゃんの安定」が得られたとして表現している。そのことは”抱っこ”が、”声かけ”という聴覚的刺激とは異なる触覚的、感覚運動的刺激であることが反映していると考えられる。さらに、赤ちゃんの安定した反応や母親求める肯定的な反応は、母親としての実感や幸福感をもたらしているようである。1ケースに「ぐずる」という否定的な記述があったが、その意味の詳細につい

ては明らかではないが、今後継続的に経過を追っていきたい。

⑧”赤ちゃんが機嫌がよいときは”

回答は18ケース中16ケースについて得られた。大きく、赤ちゃんの行動（反応）と母親自身が感じることや行動を表現したものとに分けられる。例えば赤ちゃんの「笑う」という反応は、母親に「うれしい気持ち」をもたらし、「ニコニコ」になり、その母親を見た赤ちゃんがまた「笑う」といったように、一連の母子相互作用が展開している。また、「安心できる」「ほっとする」と答えた2名の母親は緊張が高いことが予測されたが、後述する「今の母親の不安状態」における肯定的得点の平均は4点と否定的得点平均の3点をしのぐ。また、対児感情との関連性もみられなかった。しかしながら、新生児の行動特徴評定結果で、「顔をみつめる」等反応性の項目における得点が低く、「顔を拭くと嫌がる」「泣き声は激しい」「泣き声は甲高い」の項目で高い得点となっていることから、赤ちゃん側の過敏さや育てにくさなどが背景にある可能性もある。また、「安心」と表現した2名の母親はいずれも母児別室制をとっている病院であり、今後は各施設の規模や体制、ケア方針等についても検討していく必要がある。

⑨”赤ちゃんの性格は”

18ケース中回答が得られたのは15ケースで、そのうち7名の母親が、肯定的な性格としてあげている。母親の希望として表現しているものもあった。

⑩”私は赤ちゃんに将来”

18ケース中15名の母親の回答があった。「健康な子」「幸せな人生」などだれにでもあてはまるような漠然とした思いがほとんどであった。早期新生児期では、身体症状や育児のことに気を取られたり、幸せをかみしめたりする時期であると考えられ、具体的な表現がみられなかったのであろう。したがって、母親をはじめとする養育者の育児に対する意識や養育姿勢がいつ頃から具体的になり、それはまたどのように形成されていくのかということも今後の検討課題として残る。

3)母親の身体の調子

5項目全部について、「まったくあてはまらない」または「あまりあてはまらない」から「非常にあてはまる」または「ややあてはまる」までの回答がみられ、個人差が大きい。母児同室制か、母児別室制かで得点の平均値を比較したところ、(2)よく眠れるの項目について両群に有意な差がみられた。従来から、母児同室制の短所としていわれていることと矛盾しない結果となったが、相互作用評定における「母親は疲労が感じられる」項目や、他の身体の調子に関する項目については、有意な差はなかった。

4)母親としての実感

ほとんどの母親が「妊娠に気づいたとき」から母親としての実感があり、出産後の今も「まだ実感がわかない」をあてはまるとした母親はいなかった。母親としての実感の平均得点で、最も高かったのは、(13)授乳したとき　で、「あてはあらない」とした母親はいなかった。「あまりあてはまらない」とする回答もあったが、以下平均得点の高い項目は、(12)抱っこしたとき、(11)赤ちゃんと対面したとき、(10)出産のとき、(8)超音波で胎児をみたとき、(7)胎動を感じたときと続く。いずれも、視覚的、触覚的、感覚運動的に胎児あるいは新生児と関わっており、特に授乳や抱っこというった触覚的、感覚運動的感覚モダリティを介して展開される相互作用は、母親としての実家を強化する大きな要因であることが予測される。

5)育児について

「あてはまる」から「あてはまらない」の両極にわたる回答があったのは、(16)育児は楽しみだ、(17)仕事や家事との両立ができるか心配、(25)できるだけ早く仕事に復帰したい、(26)育児に専念したい、(27)この子中心の生活になるのはしかたがない、(28)この子を見ていると母親の私がいなくてはと思う、(29)この子は私のことが好きである(30)これからの育児をうまくやっていけるか心配である、(31)私は母親にむいている　の項目であった。今回は、協力者へのプライバシーや負担を考慮し、母親の職業や家庭環境については聞いていないが、第2段階以降に調査協力者に了解の上情報を得る予定であるので、詳細はその後分析検討することとする。その他の項目は赤ちゃんの育児に対する肯定的な認識で、ほとんどが「非常にあてはまる」か「ややあてはる」であった。

6)赤ちゃんの父親について

2項目ともほとんどが「非常にあてはまるる」、「ややあてはまる」の回答で、肯定的にとらえている。今後は、育児参加や母親のサポートとして役割が期待される可能性があり、とらえ方の変化についても検討していきたい。

7)今のあなたの赤ちゃんについて

「あてはまる」から「あてはまらない」の両極にわたる回答がみられているのは、(34)母乳（ミルク）をよく飲む、(36)よく笑顔をみせる、(41)よく眠る、(43)おとなしい子だ、の4項目で、他の項目は、「どちらでもない」から「非常にあてはまる」の範囲で

全体的に肯定的にとらえている。新生児行動特徴評価と対応する項目で、相関がみられたのは、新生児行動特徴評価項目の(5)眠っていることが多いと母親による評価項目(43)おとなしい子だ(r=.83,p<.0001)、新生児行動特徴評価項目の(6)手足を活発に動かす　と母親による評価項目(34)母乳（ミルク）をよく飲む(r=.47,p<.05)、新生児行動特徴評価項目の(11)人の顔をじっとみつめる　と母親による評価項目(37)私のことをよく見る(r=.50,p<.04)、新生児行動特徴評価項目の(16)ちょっとした音にも驚く　と母親による評価項目(38)抱っこすると安心する(r=.57,p<.02)、新生児行動特徴評価項目の(14)顔を拭くと嫌がる　と母親による評価項目(39)話し掛けると聞いているように感じる(r=－.66,p<.003)、新生児行動特徴評価項目の(15)新しい刺激にすぐ慣れて落ち着く　と母親による評価項目(37)私のことをよくみる(r=.57,p<.02)、新生児行動特徴評価項目の(16)ちょっとしたことですぐに泣くと母親による評価項目(39)歯話しかけるとじっと聞いているように感じる(r=.51,p<.03)、新生児行動特徴評価項目の(17)泣き出してもすぐに泣き止む　と母親による評価項目(42)よく泣く(r=－.55,p<.02)、(43)おとなしい子だ(r=.51,p<.03)、新生児行動特徴評価項目の(18)表情が穏やかである　と母親による評価項目(42)よく泣く(r=－.50,p<.03)、新生児行動特徴評価項目の(21)泣き声は激しい　と母親による評価項目(39)話しかけるとじっと聞いているように感じる(r=－.55,p<.02)、新生児行動特徴評価項目の(22)泣き声は弱弱しい　と母親による評価項目(34)母乳（ミルク）をよく飲む(r=－.48,p<.04)、であった。新生児の行動特徴についての評価が、看護者と母親である程度相関している結果がでたが、今後ケース数を増やして、因子分析等をおこなっていく予定である。

8)母親の心理状態

(47)満足しているの項目以外は、「あてはまる」から「あてはまらない」の両極にわたる回答がみられた。(47)満足しているの高得点は、出産後の感想や、赤ちゃんへの思いについての結果と対応する。

9)対児感情について

肯定的項目と否定的項目についての各ケースの平均値を求め、前項目の8)母親の心理状態の肯定的項目の平均値と否定的項目の平均値の相関をみたところ、母親の心理肯定的項目得点と、対児感情否定的項目得点に負の相関が(r=-.48, p<.04)、また、母親の心理否定的項目得点と、対児感情否定的項目得点とに相関（r=-.51, p<.03）がみられた。つまり、母親の心理状態が、より肯定的傾向にあるほど、赤ちゃんに対する否定的感情の度合いが低くなり、母親の心理状態が否定的傾向にあるほど、赤ちゃんに対する否定的な感情の度合いが高くなるということである。母親の特に不安などの心理状態は、赤ちゃんに対していだく感情に反映すると考えられる。

■　研究の限界と今後の研究計画

今回の報告では、調査が継続中で収集したケース数が18と少なく、質問紙項目の因子分析や新生児の行動特徴と母子相互作用、母親の体調や出産体験、対児感情、育児姿勢や育児意識間の相関についても分析できなかった。また、今回は、被験者や評価者となる看護者への負担をなくすために、の妊娠分娩経過や家族関係、育児環境については、問わなかったが、今後ケースを増し分析を深めるとともに、継続して協力の得られたケースについては、詳細に分析検討していく予定である。

(謝辞：本調査にご協力いただいた松田病院松田修典院長をはじめスタッフの方々、ならびに山下産婦人科内科小児科医院、山下通隆院長をはじめスタッフの方々、アンケートにお答えいただいたお母さまにこころより感謝申し上げます。)

参考文献

1)Klaus,M.H,&Kennell,J.H.:Parent-I-nfant Bonding. 2ed.The C.V.Mosby Company,1985.（竹内徹，柏木哲夫，横尾京子（訳）：クラウスケネル親と子のきずな．医学書院，1985.

2)古澤頼雄：新生児の個体反応性．心理学評論，22（1），1979.

3)古沢頼雄：発達初期における母子交互性－新生児・乳児の養育者に及ぼす影響を中心に－．教育心理学研究，23，1975.

4)Brazelton, T.B.,&Nugent,J.K.:Neonatal Behavioral Assessment Scale.3rd edition.Mac Keith Press,1995.(穐山富太郎　監訳，大城昌平・川崎千里・鶴崎俊哉　訳：ブラゼルトン新生児行動評価原著第3版．医歯薬出版株式会社，1998.）

5)陳省仁，呉敬慈：「泣き」や「ぐずり」と乳児の発達．三宅和夫（編）乳幼児の人格形成と

母子関係．東京大学出版，p.p.77 − 94，1991．
6)高岸由香，宅見晃子，稲垣由子，中村肇：幼児の自律機能・行動上の問題・気質と親の養育態度の関係．小児の精神と神経,(4)，315 − 325，1996.
7)竹内ますみ:新生児期における行動特徴−ブラゼルトン新生児行動評価尺度と看護婦による対乳児認知との関連−．心理学研究，55（5），1984
8)庄司順一・副田敦裕・岩崎亜美・前川喜平：子どもの気質に関する研究(2)−母親がとらえた新生児の行動特徴の検討−．日本総合愛育研究所紀要，33，245 − 249，1996.
9)堀洋道・山本真理子・松井豊（編）：人間と社会を測る．心理尺度ファイル．垣内出版株式会社，1994.
10)花沢成一：母性心理学．医学書院，1992.
11)川喜多二郎：発想法ﾑ創造性開発のために．中央公論社，1993.
12)川喜多二郎：続・発想法ﾑKJ 法の展開と応用．中央公論社，1993.
13)川喜多二郎：川喜多二郎著作集 5KJ 法ﾑ渾沌をして語らしめる．中央公論社 1996.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨　本研究の目的は、乳幼児の気質的行動特徴と保護者の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を明らかにすることである。本論文では、研究の第一段階として健康な新生児とその母親を対象に以下の調査を実施し現在も継続している。看護者による新生児行動特徴評定、授乳場面における相互作用評定と、退院前の母親に対して、出産体験に伴う感想、現在の心身の状態、対児感情や認知、そして育児意識や姿勢についての質問紙調査である。18 組のケースを回収、分析した。その結果、看護者が評定した新生児の行動特徴は母親の認識と相関する項目もあり、今後ケース数を増やし因子分析等をおこなうとともに、母親の認識、1 ヶ月時の乳児の行動特徴などとも関連させて分析考察していく。母親の出産体験においては、全体的には肯定的な回答傾向であった。特徴的だったのが痛みや苦痛といった否定的な内容と喜びや達成感といった肯定的な内容の両方が混在する点である。また、母親の育児意識や養育姿勢に関する記述は抽象的な内容の記述がほとんどであったことから、母親の育児意識はこれから形成していくと考えられ、諸要因については今後分析検討していく。母親の記述のなかで、個別には援助の必要が示唆される記述もみられたので、継続して関わっていく必要がある。また、今回は出産後からの調査であったが、妊娠期からの要因や分娩経過等についても関連が予測されたので、妊娠期からケースをおっていくことも検討したい。本論文では明確な示唆が提示できなかったが、今後も縦断的に調査実施し、新生児期の結果がその後の養育者の育児や子どもの行動特徴にどうつながっていくかということを明かにし、援助の指針とする予定である。